

佐久間象山の儒学思想研究

韓, 淑婷

<https://hdl.handle.net/2324/2534515>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (学術), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏名	韓 淑婷			
論文名	佐久間象山の儒学思想研究			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	東 英寿
	副査	九州大学	教授	清水 靖久
	副査	九州大学	教授	高野 信治
	副査	九州大学	名誉教授	吉田 昌彦
	副査	長崎大学	教授	連 清吉

論文審査の結果の要旨

本論文は幕末の思想家佐久間象山の儒学思想について、これまでの研究において看過されていた側面に注目し、幕末当時における象山の思想の実相をできる限り解明しようと試みたものである。

本論文の第一章「佐久間象山の朱子学理解—「居敬」を中心にして」では、象山の思想的基盤である朱子学を取り上げ、従来注目されていなかった「居敬」という要素について、象山の考える「居敬」の内容、性格、特徴を明らかにする。第二章「佐久間象山の洋学受容と朱子学—「居敬」の機能に注目して」では、「居敬」という要素が象山の洋学学習にいかなる役割を果たしたのかについて、具体的に彼の砲学習得を通して検討し、朱子学の学問方法である「窮理」と「居敬」が象山の「東洋道德、西洋芸術」論にいかなる意味をもつのかを考察している。第三章「佐久間象山における「楽」の思想—琴学の全体像」では、象山の「楽」思想を取り上げ、象山における琴学の習得、琴学に関する著述及び琴学資料の収集を検討し、さらに『琴録』の編纂に着目し彼の琴学思想を概観する。続いて第四章「佐久間象山における琴学—『琴録』の意義」では、象山が実際に編纂した『琴録』を取り上げ、『琴録』の書誌情報を明らかにした上で、『琴録』の内容、編纂方式、琴学における主張を検討し、『琴録』の特色を明らかにする。第五章「佐久間象山における「礼」—『喪礼私説』を中心にして」では、これまで全く研究されていなかった『喪礼私説』を研究対象としてとりあげ、その作成意図や特色を詳細に考察し、象山の儒学思想において『喪礼私説』が重要な位置を占めていたことを指摘する。第六章「佐久間象山の政治発言における儒学經典の運用」においては、象山が政治問題を思考する際にどのようにして儒学から知恵を獲得し、政治主張を表明する際にいかに儒学の論理に依拠していたのかについて詳細に検討し、従来見逃されてきた象山の政治思想における儒学經典の運用の一側面を明らかにする。

以上、本論文では、象山の「東洋道德、西洋芸術」が存立する方法論的基盤を明らかにした上で、彼の学問の特徴は「窮理」という当時の学問的「常識」において、「居敬」を同時に提起することにより、朱子学の学問方法を洋学受容に応用させ、洋学を為す主体には「仁」の素養が要求されるという意味において、方法としての「居敬」を重視していたことを明らかにする。さらに、象山が唱えた「東洋道德」について、「東洋道德」は礼楽思想を主軸に提起されたこと、あわせてこの礼楽思想は律呂への重視と儒式喪礼への主張を具体的内容としており、象山が礼楽思想を主軸とした「東洋道德」に基づいて「西洋芸術」を取り入れていたことを指摘する。また政治論においては、象山は「国力」を重視しながらも、人心の統合・庶民の教化及び社会秩序の強化などの面を強調し、その「国力」に儒学の「徳」が深くかかわっていたことを確認し、軍事力を優先し「徳」という要素

を後退させることなどは決してなかったことを論証する。

以上、本論文は佐久間象山の儒学思想について、先行研究とは異なる独自の視点を踏まえてその実相を能う限り明らかにしたものであり、幕末の思想研究に多大な貢献を果たしたと言える。よって、本論文は博士（学術）の学位を授与するに値すると認められる。